

アムールの風

（正統右翼の論理）

● 第1回

田中健之

TANAKA takeyuki

はじめに

国土・平岡浩太郎の曾孫として生まれて

まず、最初に私が何者なのかということから、話を進めていきます。

私の曾祖父は平岡浩太郎という人で、玄洋社という福岡で成立した自由民権運動をするための地方政社の初代社長でした。ちなみに玄洋社とえば、今日では右翼の源流だとも言われています。曾祖父はまた、衆議院議員として、地元福岡の筑豊地方の炭

鉱王としても知られた実業家でもありました。

平岡浩太郎は頭山満、箱田六輔と並んで玄洋社の三傑と言われた人で、その浩太郎の実兄である内田良五郎の三男が、後に黒龍會を創立した内田良平です。つまり私の曾祖父、平岡浩太郎の甥が内田良平であり、私の祖父の従兄にあたります。

また、明治・大正・昭和の三代の御代にわたって日本の国土として讃えられてきた頭山満は、平岡浩太郎と共通の清水藤衛門という人がその祖先です。

ところで祖父の長兄・平岡良助の嫁は、西郷隆盛

の弟で、小西郷として知られている西郷従道の娘・栄子です。

私の祖父は平岡豊と言ひ、平岡浩太郎の八男です。「田中」という苗字は、私の祖母が一人娘であったことから、婚姻によつて平岡姓に祖母が改姓したら田中家がなくなってしまうため、祖父が田中姓を名乗ることによつて、田中家がなくならないようにしたのです。

私は小学生の頃、両親や平岡本家の親戚と共に、お盆やお彼岸のたびに曾祖父の墓所を掃除し、お参りをしてきました。広大な敷地に建つ曾祖父の墓石の横には、私の祖父の名前も息子として彫られていました。

また巨大な石碑も聳え建っていました。子ども心に、こんな墓に眠る私の曾祖父とは如何なる人物だったのかということに、すこぶる興味を抱きました。

それ以来、私は小学生ながら、曾祖父の平岡浩太

郎の生き様やその甥である内田良平の生涯、そして西郷隆盛の思想と行動を調べることに余念がなくなりました。

私は曾祖父が創立し、自ら初代社長となった「玄洋社」とはどんなものであったのかということに興味を持ちました。

「玄洋社って何？」と両親に聞いても、「よくわからない」という答えしか返ってきません。

そこで百科事典で玄洋社を調べると、日本最初の「右翼だ」と書かれてありました。

小学校三年生当時、右翼と言われても何のことだかよくわかりません。ただ、父と出かけた時に、大きな日の丸と海軍旗を掲げた国防色に塗られた装甲車のような大型トラックが街中に停められていました。その厳ついトラックに興味を持った私は、当初、自衛隊かなと思つて父にそう尋ねてみたところ、「右翼だ」という答えが返ってきました。

うないでたちをしていたことから、「右翼とは国を護る仕事をする人々」だと勝手に思い込んでしまいました。たしかに「自主国防」や「防衛体制強化」などをスローガンに掲げ、街宣車で軍歌などを流して走る右翼は、「国を護る仕事をする人々」だと言えるのかもしれません。

ちょうどその頃に私は、大東亜戦争を題材とした『決断』というアニメを毎週楽しみに見ていました。時を同じくして『仮面ライダー』の放送も始まつており、同級生の大半がこれを見ていたのに対して、私は『仮面ライダー』に見向きもせず、『決断』を夢中になって見ていました。

竜の子プロダクションが制作したこのテレビアニメは、実在の人物、兵器を忠実に描き、効果音は実写映画に使用される本物の爆発音やエンジン音を使用したものでした。

『決断』によつて大東亜戦争の歴史を知ることができました。私は、じつに多くの日本人が、大東亜戦

争によつて犠牲になったにも関わらず、何故、アメリカに媚びへつらわなくてはならないのか、と子どもながらに疑問を持ち、憤りもありました。その気持が、今日の私の思想的またはその行動の原点となつていると言つても過言ではないと思つています。

ところで学校では、当時アイドル歌手として流行つていた西條秀樹が同級生の中で話題になりましたが、私はそれを知らずに、「西城秀樹ではなく東條英機が正しい」と言つて、啞然とさせました。

またその頃、福岡市長選挙があり、選挙宣伝カーからよく、「進藤一馬」という候補者の名前が連呼されていました。この進藤一馬という人は、後に福岡史上に残る名市長となる方ですが、玄洋社の関係者で、我が家とも縁が深い人だということを、親戚から当時聞かされていました。

そう言えば、曾祖父である平岡浩太郎も衆議院議員であつたことも思い出しました。そこで私は思い

ました。曾祖父が創立した玄洋社とは、「国を護るための会であり、そのために曾祖父をはじめ、進藤一馬さんのような政治家を日本に送り出すための会なのだ」と勝手に思い込んでいました。

私は政治家よりも軍人に関心と憧れがありました。国を護るのは政治家ではなく軍人ではないのかと思っていました。何故ならば、テレビで国会中継を見るたびに、野次と怒号、喧嘩をする人々を見て、その馬鹿さ加減に、大人なのにじつにみっともないと思ったのです。

祖母の実家は軍人で、日露戦争の時に工兵中将であった落合豊三郎が私の祖母方の曾祖父になります。親戚には陸軍第二師団長であった岡崎清三郎がいます。政治よりも軍事の方が重要なのだと、子どもながら漠然と考えていました。落合豊三郎については、司馬遼太郎が『坂の上の雲』で記していることから、家の本箱からこの本を引っ張り出して読んでいました。

決してこれをかえることなかるべし」と後書きされており、「違反する者は日本人の子孫ではない」という一文が添えられていました。

私はこの文を目にした時に、はつきりと曾祖父、平岡浩太郎が遣り残したことを、曾孫の私が続けてやらなくてはならないという、強い気持ちに駆り立てられました。その時の気持ちは半世紀近く経った今日でも鮮明に覚えておりますし、今まで私が生きて活動して来たことの原点であるのです。

『玄洋社史』を読んでわかったことは、玄洋社が西郷隆盛の思想の系譜に連なり、未完成であった維新を継続して行おうとしてきた志士の集団であること。それに中華革命などを支援してアジアの独立支援と欧米列強諸国による日本侵略を阻止することにあつたのです。

私はその事実を知って、まさに玄洋社こそ唯一、在野の人々が生命を賭して日本を維新し、アジアを興すサムライ的な集団であり、政府による一官僚

また、祖父母の家に遊びに行つた時、『玄洋社史』という『東亜先覚志士記伝』という表紙に龍が唐押しされた分厚い三冊の故書籍を見つけました。いずれの本にも、平岡浩太郎の名前が随所に見られたため、すこぶる興味がそそれられ、これらの本を祖母に譲ってもらいました。古い漢字と仮名遣いに溢れる極めて難解な本でしたが、曾祖父が如何なる人物であったか知りたい一心で、漢和辞典と国語辞典を手にも、まるで暗号を解読するようにして一字一字調べて読み進めました。

その中で強烈な一文を目にしました。それが、「玄洋社憲則」です。

- 一、皇室を敬戴すべし。
- 一、本国を愛重すべし。
- 一、人民の権利を固守すべし。

玄洋社憲則には、「尊皇」「愛国」「民権」という日本の三柱が簡潔に記されていました。その憲則には、「子孫に伝え、人類いまだこの世界に絶えざる間は、

機構としての軍隊よりも重要な組織なのだという認識を新たにしました。そして私は、玄洋社の精神を今日に蘇らせる必要性和その責任を実感したので、そう思う私は、全身に鳥肌が立つほど緊張したのでした。

その反体制を貫く強靱な精神は、まさに筑前勤皇党以来の伝統であり、西郷隆盛に呼応して蹶起し、その大半を失った先人方の殉国精神を彰かにすることの必然性を直観したのです。

中学校時代の教科書には、西郷隆盛の日韓親善を説くための『遣韓論』を『征韓論』だと決めつけ、朝鮮を侵略するための主張であったとする偏見に満ちた誤りの記述に著しく憤りを覚え、教師にそれを訴えても、「テストには教科書通りの答えが求められるから、余計な疑問を持たずに教科書の記述だけを憶えておけばよい」という態度に反発を抱きました。

そしてそうした誤れる歴史観はすべて、日本の敗戦によってアメリカから日本を弱体化するために押

しつけられたのであり、それを打破するためには、私自身が立ち上がり、実践運動をするしかないという気持ちになったのでした。十二歳の時です。

それ以来、今日に至るまで、四十五年間の歳月を実践活動と歴史研究の文武両道に努めて参りました。

私が高校生の時、現役の福岡市長であられた進藤一馬先生が、地元福岡で「玄洋社記念館」を開館なさいます。玄洋社記念館が定期的に刊行する『公報』を私は熟読しました。また、平岡浩太郎の曾孫であることを知った同記念館の方が、『玄洋社発掘』という画期的な新刊書を献本してくださいました。同書の筆者である石瀧豊美氏は、玄洋社の産みの親と言われた高場乱先生のご子孫にあたる方でした。

その一方、私は頭山満翁の本家直孫である頭山立國先生の新橋にあった事務所へ学校帰りにほぼ毎日のように通い、いろいろと頭山満翁について口伝を給りました。

頭山先生とのご縁は、日本の独立を護るために、頭山立國先生は、内田良平と共に日韓合邦運動を行ない、結果として日本政府から日韓併合にすり替えられたことよって、当時から今日に至るまで、韓国では「売国奴」にされてしまった李容九の一人息子である大東國男氏を私に紹介するために事務所へ招かれて、一緒に鰻重の出前を食べながら内田良平と李容九、それに日韓合邦についての話をする機会を作っていたいただきました。それを機に私は吉祥寺に居を構える大東國男氏の宅に度々伺い、日韓合邦や黒龍會などのお話を伺いました。

また、『頭山満評伝』を著した作家の長谷川義記先生をはじめその他の先生を事務所へ招かれて、それらの先生方を私にご紹介くださいました。

玄洋社、黒龍會の思想と行動について熟知され、民族派随一の理論家、歴史家として知られていた葦津珍彦先生に紹介状を書いて下さり、高校の帰りに鎌倉にある葦津先生のご自宅をお訪ねしたこともあり、私が頭山事務所に通っていた高校生の

欧米列強諸国による日本に対する植民地化を推し進める条約改正を阻止するために、当時外務大臣であった大隈重信に対して爆裂弾を投擲してこれを阻止し、自らは自決して果てた来島恒喜先生の墓の前でした。

その日はちょうど、来島先生の御命日だったので、私が同級生や後輩に声をかけて墓参に行く途中、墓地の中ですれ違った集団が、頭山立國先生のご一行でした。

「私の父があなたのお爺さまから大変にお世話になって」とお声掛け下さったのが、頭山満翁の次男に当る頭山泉先生でした。その横に立っておられたのが頭山立國先生でした。

墓参から数日後、頭山立國先生から新橋の頭山事務所へ遊びに来るようという連絡がありました。私は学校帰りに新橋にあった頭山事務所へ伺い、頭山先生からお爺さまの頭山満翁に纏わる話を口伝していただきました。

日々、頭山満翁が生前、葦津珍彦先生に自らを語り、葦津先生がこれを纏めて岩波書店から刊行する予定であった『頭山満正伝』が未定稿として地元福岡の出版社から刊行されました。

同書は大東亜戦争の激化によって刊行できなかつたのですが、原稿が頭山泉先生のご自宅から発見されたことを機に出版するに至ったものでした。

頭山立國先生は、同書を私に下さるべく「君にお祖父さんの本を差し上げるから事務所へ遊びにいらっしやい」とお電話をくださいました。

当時から四十年以上の歳月を経た今日、いろいろと玄洋社や黒龍會それに関係した先輩方は皆、鬼籍に入り、四十代はじめてであった頭山立國先生も今は八十歳半ばに近い歳になり、私も五十歳代後半になりました。私は幸い若くして志を得て、玄洋社や黒龍會に関係した先輩方から直接その雰囲気や精神、思想に触れたことはもはや最後なのではないかと思っています。

玄洋社、黒龍會の道統継承者として、民族運動に身を投じ、中国やロシアなどでの活動の場を求めて大陸に渡った者として、机上の論理ではなく、実践者の言葉として、そして何よりも玄洋社、黒龍會の道統を継承する者の声として本稿を著すことにしました。

右翼という存在が、単純に「反共」を主張し、「日教組打倒」、「北方領土奪還」を繰り返し連呼し、「嫌中」「嫌韓」を闇雲に叫ぶ一団として、または「維新」という革新性を失い、単なる自民党の院外团的な存在として、一般社会からは、「社会病理集団」として乖離する存在となってしまう今日、玄洋社、黒龍會の先輩方が生命を賭して活動をし、訴えて来た正統な論理を、私の活動の経験や口伝をもとに論を進めていきます。

内田良平の長女・年恵は、「私のお父さんたちの時代は、『どうやって日本の国益にかなえさせるのか』、それだけを基準にして諸外国を相手にしてい

ました。なのに、いまの人たちは反日だから嫌いだとか、親日だから好きとか、日本人はずいぶんと小さくなりましたね」(拳骨拓史著『親日派』朝鮮人記された歴史)と評論家の拳骨拓史氏に語っています。今日の右翼および右派市民団体の動向を見た時、玄洋社、黒龍會の先輩の精神と道統を明らかにするとこそが、混迷する日本の政治に指針を示し、日本人の歴史観、価値観に新たな道を顕すことだと強く信じています。



田中健之 (たなか けんじ)

歴史作家、昭和38年11月5日生まれ、福岡市出身。
玄洋社初代社長岡浩太郎の曾孫で、黒龍會を創立した内田良平の血脈遺跡を継承する親族、拓殖大学日本文化研究所近代研究センター客員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所及びモスクワ市立教育大学外国語学部客員研究員、日露善隣協会会長、2008年に黒龍會を再興し会長に就任。主な著書に『運国に祀られる人々』、『昭和維新』、『北朝鮮の終極』、『実は日本人が大好きなロシア人』、『横浜中華街』など。『中央公論』、『正論』、『歴史群像』などの論評誌に多数執筆。